文化財だより

第３号

平成２年３月

発行　真鶴町教育委員会

特集 漁業の歴史

真鶴は、古い伝統に支えられたところです。

〝海と緑と太陽に恵まれた心ふれあう住みよい町〟と愛されるには、文化財とのかかわりが強くなければなりません。

町の文化財、ひいては町の歴史を知り、それらを身近なものとしていくことによって、郷土愛にまで高める必要があります。

本号は、漁業の歴史にスポットをあてて特集を組みました。

(一)漁業のあけぼの

〔漁業と釈迦堂遺跡の出土品〕

真鶴町字上山には、古代人の洞穴住居跡があり、釈迦堂山遺跡から弥生式・縄文式の古器・矢じり・魚の骨で作った釣針や漁に使ったと思われる石錘が出土しています。

海岸や入江で漁をした生活があっただろうと想像することができます。

〔漁業に適した自然条件〕

箱根火山の溶岩流が三キロメートルほど相模湾に突出した半島と真鶴湾や岩海岸は、黒潮支流の影響で魚が回遊をし、常緑広葉樹林の多いことから、魚附保安林としての役割りを果たし、沿岸魚や回遊魚の遠海へ散逸することを防ぎ、豊富な漁場としての条件を満たしていたでしょう。

目次

〝特集〟　漁業の歴史……1～3

(一)漁業のあけぼの

・漁業と釈迦堂遺跡の出土品

・漁業に適した自然条件

(二)鎌倉～室町時代

・物々交換から魚の売買

・源頼朝挙兵と漁業のかかわり

・あわび漁の海士

(三)江戸時代

・上方（関西）漁業の進出

・岩村の漁業

(四)明治～昭和時代

・根拵網の導入

・真鶴村漁業組合・漁業協同組合

(五)現在の水産業

・養殖による漁業

・今後の真鶴港

漁業関係年表……2～3

海の信仰と民話……4

○まつりのご馳走『へらへら餅』

○「えびす講」夜のにぎわい

○井戸の底から船が出た

○大山講　　○真鶴大漁節

町誌編さん室・民俗資料館の案内……5

郷土研究　真鶴小学校の子どもたち……6

釈迦遺跡発掘（真鶴中）……7

漁業史関係町指定文化財一覧……8

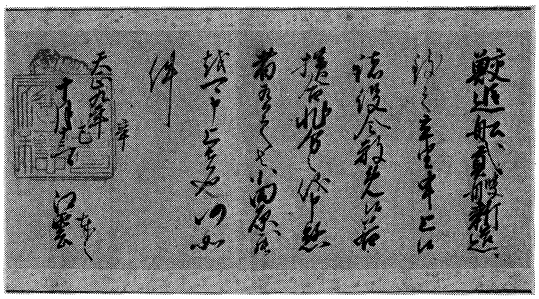
(二)鎌倉〜室町時代

〔物々交換から魚の売買へ〕

平安末期から鎌倉時代へかけての文献を考察すると「肴鮑海老売買文書」で魚やあわび・えびなどの売買に使用する貨幣について通知されているのを見ても、小田原番所の管理下にあって魚類の売買が活発に行われていたことがわかります。

〔源頼朝挙兵と漁業のかかわり〕

源頼朝が船出し、挙兵のときの功績で岩村の鮫追船船役免除の史実と合わせ考えると、岩村の漁業が盛んであったことと、「北条氏朱印状」の文面から、新造船への配慮がありました。この時代の漁業発達過程から、さで網・地曳き・敷網等存在していただろうし、釣漁も相当に行われ対象魚も大きいものから小型のものへと変化していたと思われます。



▲北条氏朱印状　鮫追船課税の免除（天正9年）

〔あわび漁の海士〕

小田原北条氏の下知状に「京都への御用に使う大のしを作るため大つぶあわびを長く手ぎわよくむくために真鶴のかつぎ衆（海士）の中から二十人を三崎に差し出すように」とあり、真鶴の漁夫のようすがうかがえます。

(三)江戸時代

〔上方（関西）漁業の進出〕

この時代になると、関西漁民の活動による上方漁法流入が当地方にも及び、著しい発展をしています。

寛永十四年（一六三七）に紀州（紀伊国、現和歌山県）の人、田広与次兵衛が尻掛浦に本拠を置き、ぼら漁の漁場を開発し、やがて紀伊候の後ろ楯や小田原藩の運上場請負により特権を付与され、大規模な漁業経営に成功しています。

寛永二十年（一六四三）に泉州（和泉国、現大阪府）の人、池田弥惣兵衛は、宮の前に本拠を置いて鯛長縄漁をはじめ小田原藩の運上場請負により可成りの成果を収めたようです。

このような上方漁業の進出は、新漁法を伝播した上、在来漁法にも多大な好影響を与えています。

真鶴村書上帳によれば、丸木船三十五艘、海士船一艘が漁業用に使われ、地元民の漁業がわかり、名主五味家は浜方名主の家柄でありました。

⊙ぼら網漁の発展

田広家に伝わる「尻掛浦由来根元記」により、鰯漁を与次兵衛が祖となり、鰯網を初めて村人に教えています。開始当初は五・六人であったが、天保十三年頃には、八十人の漁師をかかえ、労働力として地元漁夫を雇用しています。

⊙鯛長縄漁の開発

真鶴湊で長縄漁業を始めた初代弥三兵衛は、先づ房州石小浦に進出し近郷の漁師の元締めをしています。これまでの自給自足的な地元漁民の中に、大規模な上方漁法を導入、彼等を雇傭して江戸に対する商品化を意図した活動をしています。

〔岩村の漁業〕

岩村では磯を持ち乍ら漁師が少なく、元文元年（一七三六）の岩村漁師目録を見ても十二人とあり、「足なし網・鮭夜網・海老網・ぼうけ網等を合わせて十一畳」となっていて、岩村の漁業は、小規模で真鶴より出張した漁業が主であったようです。

▲民俗資料の7
紀州侯御用達船印・木札
民俗資料の6▲
紀州侯御用達船印・旗

漁業関係年表

先史時代　釈迦堂遺跡
土器、石器、石硬など出土。

一一九二　源頼朝が岩村の鮫追船の船役を免除したと伝えられる。

一五二八　沿岸漁業が盛んになり、各種の網漁業が普及した。

一六三七　紀州の田広与次兵衛が尻掛でぼら網漁をはじめる。

一六四三　堺の池田弥惣兵衛が鯛はえ縄漁をはじめる。

一六七二　村の戸数は二百七戸、村高二百八十三・四石、船数は九十六隻（漁船三十七隻）また、四艘張網をはじめ各種の網漁業が発達する。

一六八六　田広与次兵衛（三代目）が小田原藩主から、ぼら網漁を新田名田同然として公認さる。

一七一五　岩が石材業不振のため漁業渡世を願い出る。

一七八五　田広与次兵衛が、小田原藩から伊豆山般若院領内海域の小魚漁（かつを等三品）の請負いを認められる。

一七九四　池田与七郎請負の鯛延縄漁不振のため運上金の滞納が続いたので、村が運上場を管理す。

一八二五　真鶴村の名主五味台右衛門が根こさい網を張り立てる。

一八三六　真鶴村が飢餓のため困窮し、黒崎マグロ網場を五ヵ年間提供することを条件に、田広与次兵衛から三百両を借用する。

一八四八　真鶴村が、不漁と穀物高値のため困窮し、黒崎マグロ網場を七ヵ年間提供を条件に、田広与兵衛から二百両の貸与を依頼する。

㈣明治〜昭和時代

〔根桁網の導入〕

北陸の加賀地方より五味台右衛門が導入した松山下漁場の根桁網は、明治十一年沖網漁場で三千本の鰤を水揚げしています。「真鶴漁業史」（青木利夫著）によれば、明治三十二年、大沖・沖網・二番下・古網・高浦の漁場で操業し、メジ・マグロ・サワラ・鰹・鰤が主でした。

〔真鶴村漁業（漁夫）組合から漁協へ〕

明治三十六年に漁業組合が結成される前は、漁夫組合であったが漁業法（三十五年）施行により、漁業権の管理・貸付が漁業組合へ移り、昭和十五年産業組合法により保証責任真鶴町漁業組合となりました。昭和二十四年改正漁業法の施行で、現在の協同組合が誕生し、漁業が行われるようになっています。

⊙真鶴港の築港と改修

関東大震災後、真鶴漁港が昭和九年に完成。漁法も近代化が進み漁業の隆盛を見ましたが、昭和二十四年のキティ台風で大被害を受け港湾は、二十九年に改修され、以来鰤漁の最盛期が続き、魚市場の水揚げは一日数万本にもなりました。

㈤現在の水産業

〔養殖による漁業〕

鰤漁が不振となった現在では、漁業の方向も時代に即応して変っています。

定置網漁場も高浦・番場浦・大浦・古網・沖網・改良網・瓢漁場などで、カマス・アジ・サバをはじめサバ・ウズワなどの漁が続いています。

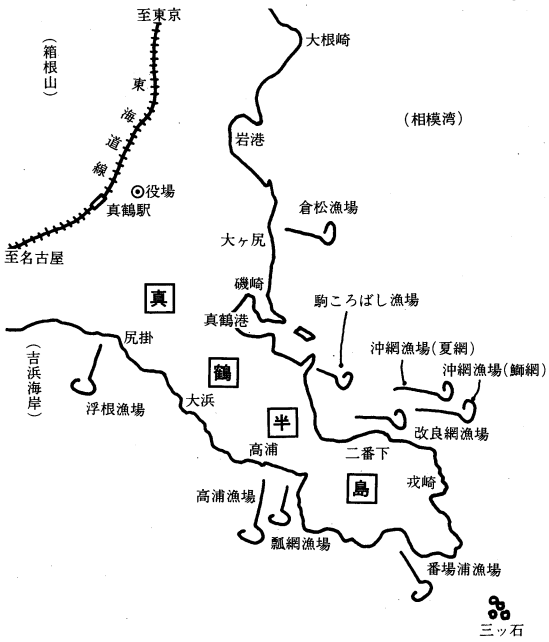
ワカメの養殖も最近盛んで、アワビ・サザエの貝類も採れ、民宿業者からの需要に応じています。

なお、遊漁船による観光事業も併せて進められ釣船も二十隻を超えています。

〔今後の真鶴港〕

漁業の産業構造が変動している現在、漁獲のみに託しているのでは発展が期待できない。将来的にレジャー産業、遊漁船による釣客の確保と共にヨット繋溜によるリゾート化をし、港の機能を十分に発揮できるのではなかろうか。

昭和33年定置網張立位置



漁獲高の推移

（真鶴漁業調べ）

漁獲高＼（昭和）年度	51	53	55	57	59	61	62	63
数　量（t）	264	910	1.122	1.049	2.082	1.409	1.798	663
金額（百万円）	114	203	214	158	263	194	199	143

魚種別漁獲高

（昭和63年度）

区　分	あじ	さば	油かます	うまづらはぎ	いか	その他
数　量（t）	93	37	7	241	8	277
金額（万円）	6,109	3,303	999	976	727	2,186

漁業種類別経営体数

（昭和63年）

地区別＼漁業種類別	総数	刺網	釣	大型定置	小型定置	採貝	わかめ養殖
岩	13	6	3	0	3	0	1
真　鶴	86	21	29	1	10	23	2
合　計	99	27	32	1	13	23	3

一八五七　岩村が、石橋村など四ヵ村と連名で、江の浦村の根桁網張立てを藩に願い出て成功する。

一八五八　真鶴村が新網漁場に根桁網を張立てる。

一八六一　真鶴村が沖網漁場に根桁網を張立てる。

一八六九　岩村が根桁網を張立てる。

一八八三　真鶴村の定次郎が江の浦村の根桁網を請負ったといわれる。

一八八六　水産博覧会に岩村より、うずわ漁の三艘張り網が出品さる。

一九〇八　真鶴村に漁夫組合が設立され組合長に青木春五郎が就任。青木寿郎が沖網漁場にブリ定置網を導入する。真鶴村と岩村との間に、漁場問題をめぐって紛争がおこる。

一九一一　青木忠蔵が岩江漁場に櫟定置網を張り立てる。

一九一五　真鶴村沖網の経営権を小田原魚市場に貸与する。以後、昭和二十四年までの三十五年間、地元以外の個人又は法人に経営権をゆだねる。

一九三四　真鶴漁港が完成し、真鶴音頭が作られる。

一九三五　真鶴町立魚市場が開業する。真鶴町沖網漁場の定置網に、落網が導入される。この頃、平井重太郎が、はじめて漁船に機械をとりつけたといわる。

一九四八　漁業法改正ならびに漁業権等臨時措置法の施行。

一九五四　キティ台風（昭和二十四年）被害後の真鶴漁港修築工事が完成する。

真鶴に伝わる 信仰と民話

◎まつりのご馳走『へらへら餅』

貴船神社の祭礼は、海のまつりとして宮城県塩釜神社・広島県厳島神社と並んで、日本三大船まつりに数えられています。

貴船神社には、神事始めともいうべき伝説が語りつがれています。

遠いむかし、平井の翁という人が毎夜沖に現れる「奇し光」をながめ、これをあがめたのが、神迎えのはじめであるといわれ、漂海の神を迎える典型的な漁村における渡来伝説で、神社の所在地が港口にかかる点と共に、全国的に類例が多いようです。

――むかし沖に釣りに出た里人があった。そのとき船で近づいた高貴な姿の神があった。神は空腹を訴え、里人に食べものを乞うた。しかし、貧しい土地のため産物らしいものもないので、昼食に持参した麦の粉を練った餅をさし出し、空腹の神を満足させた。神はお礼に〝何でも願いをかなえてやろう〟といった。

わずかな善意に神の告げを得た里人は恐れながらと、「この里は貧しく産物とてないので、飢えから救われるだけの手だてを願いたい」と、申し出た。

神は快くこれを認め、それからの里人たちは、例え貧しくとも飢えに苦しむことはなくなったという。――

今でも古老はいう「まつりの本当のご馳走は『へらへら餅』だよ」それがあの神と接した里人の食べものだったわけです。その里人は、東の山すそに住んだ井沢家だったそうです。

◎「えびす講」夜のにぎわい

十月二十日は「えびす講」祭礼日です。この夜のご馳走は赤飯をたき、おひらにはニンジン、ゴボウ、サトイモ、ダイコン、ハス、焼豆腐、コンブ、サンマなどの煮メが盛られ、神棚から下された恵比須・大黒天の福神は、この日だけは格別扱いで床の間に飾られます。

ご馳走のセリで「赤飯二百万円、煮メ三百万円」と額が高い程、縁起がよいといわれ、にぎやかな家族の姿が目に浮かびます。

恵比須を水で洗い「それ稼げ、それ稼げ」と神像をゆさぶったといわれ、これは真鶴の神輿振りの荒神輿に見る漁村の風俗と継がるものであります。

真鶴の漁師の中では、「しろわけ」の漁獲物分配のほか『おいべっさん』といって、特別賞与的なものが行われていたあたり、民俗的な何かを解く鍵があるかも知れません。

◎井戸の底から船が出た

むかしから水で苦労した真鶴では、天坪棒を肩に急な石段を上下した婦女子が多かった。隣りの福浦と同じで、苦しい労働に対して両親は、真鶴へは嫁にやらないといったこともありました。

昭和のはじめ少し塩気こそあったが上水道が完備され、人びとはほっとし、他郷に出ると「水が甘い」と思うほど、水の塩分にならされていました。

この水源は風外堂下の「弘法の井戸」と呼ばれた湧水で、ひでり知らずの水として重要視され、関東大震災で井戸を崩壊された人々がここに集まりました。

江戸時代の奇僧風外が、天神の石祠を祀って住みついたのも、日当たりと、水に恵まれたこの地を選んだのでしょう。

井戸水にも恵まれなかった真鶴では井戸掘りに関しての異聞があります。東の宿中の魚伝さんの井戸を掘ったところ、古い舟が発見されたという。果たして舟であったかどうか確かめようもないが、あるいは古代にはいまの町なみが、お林のような森であり倒木の上に土砂が崩れ次第に平らになって、その上から井戸を掘ったのかも知れない。その証拠に別の人は神代杉に掘り当たって金気がありすぎたともいう。またその時、落した石屋のノミが何年かして岩の大根付近で見つかったという。地下水脈は磯崎から東防波堤の断層を流れるので合点ができます。

◎大山講

相模の国の中央にそそり立つ大山は、方角を確認する上や、天候予測の上でも相模湾を舞台に活動する者の大きなよりどころとなっていました。

それ故に、大山阿夫利神社に対する信仰が厚かったことがわかり、「大山講諸掛帳」（貴船神社保管）により、江戸期の大凡の状況を察することができます。

◎真鶴大漁節

一ツトセ　人も知ったる真鶴の
　鰤網漁場の　大矢声　浜大漁ダネ
二ツトセ　二見が浦の釣掘に
　自動車客は　織るがごと　〃
三ツトセ　三ツ石浜の潮干狩
　貝採る娘は　よいむすめ　〃
四ツトセ　万の神の守護をうけ
　海上静かに　豊漁に　〃
五ツトセ　いつきて見てもこの港
　出船入船　賑わしく　〃
六ツトセ　向う大島安房上總
　便りきく人　琴ヶ浜　〃
七ツトセ　渚に遊ぶ磯千鳥
　様の帰りを　ともに待つ　〃
八ツトセ　八丁櫓揃えて漕ぎよせる
　市場の庭は　鰤の山　〃
九ツトセ　小松原から戎崎
　見渡す海原　魚の群れ　〃
十　トセ　ともに揃いの万祝で
　貴船の宮へ　礼参り　〃

町史編さん室レポート
『鮫追船』を追う

本号2頁に紹介されている「朱印状」は、岩村の鮫追船について諸役（税）を免除するという小田原北条氏の達示ですが、この鮫追船に関連してさまざまなことが考えられます。

別の町史資料「岩村船役金」文書（江戸時代、船の所有に課せられた税についての記録）にはすべて鮫追船は免税と記されているところから、この特典はおそらく鎌倉時代以後江戸時代を通じてずっと引きづがれてきたと思われます。

ところで、文書に見える岩村の総船十艘内外のうち、鮫追船が三艘はちょっと多すぎる感じですし、また現存する二通の朱印状（十年おきの）にいずれも「二艘新造」とあるのを見ると、その時代の船は十年で造り替えなければならないようなものだったのか、それともまた十年の間に二艘から四艘へ増やさなければならない何らかの事情が生じたのか、等々の憶測が浮かびます。

当時の真鶴村民が〝岩の船だけに特権があるのはおかしい〟と評定していたら、北条の殿様から〝けしからんことを言うな〟と叱られたという記録もあります。

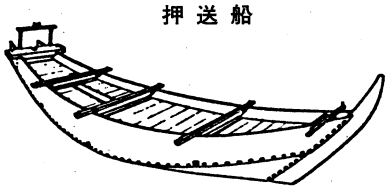
北条氏がなぜこれほどに立腹したのか、これもまた興味ある点です。

町史編纂室ではこれらについてある推測のもとに近在資料の検証にあたっています。そのもくろみを言えば、少なくとも小田原北条氏以来、岩村が水軍（海軍）基地として位置づけられ、鮫追船は有事の際の軍船としての役割を担わされた。そのゆえに一般の漁船とは格別の扱いをもってこの地域に配置されたのではないかという推測がそれです。

北条氏の戦略から相模・伊豆地方の要所々々に水軍基地が設けられていたことは事実です。一例が伊豆松崎の「鰹船」で、鮫追船同様地域の故実にそった名称がつけられたものと思われます。

水軍の要件として湊や船や兵員のほかに船をあやつる漁師が絶対に欠かせません。ましてや頼朝公の船を無事に安房の国まで届けるだけの腕を持った海の男たちのこと、彼らが水軍の隠れ要員として扱われた（無断他行禁止など）としても不思議ではありますまい。

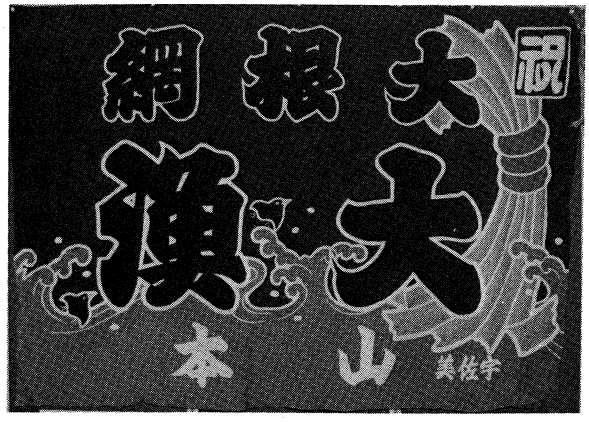
（湯本　満）



押送船

頼朝公を運んだ船は〈押送船〉か？

民俗資料館案内



真鶴町民俗資料館の土蔵二階には、漁業関係資料が展示してあります。

これらの品目は、昭和六十年十一月に町民センターで開催した「漁業史展」の際集められたもののうちから保存しているものです。

主な展示品は次のとおりです。

- ●大漁旗（原久丸・誠心丸・清風丸）
- ●ホジリ網（魚を獲る道具）
- ●ナコウド（縄をよる道具）
- ●イカ角（ヤリイカ・アオリイカ・スルメイカなど種類がある）
- ●掛ドウ（海面上の魚を掛ける道具）
- ●カットウ（岩場の釣り用具）
- ●遊魚用釣りざお（昭和二十年代に使用）
- ●カサゴ用縄バナ（ハエナワ収納用）
- ●活かし篭（イソエビなどのエサを入れて運んだ）
- ●釣道具箱（針、ウキ、ハリスその他小物の収納）
- ●ササリ網（カンパチ用）
- ●アンカ・腰かけ（夜釣り用）
- ●カーバイト・ランプ（夜釣り用）
- ●石油ポンプ（船の燃料補給用）
- ●タモ網（魚をすくい揚げるとき使用）
- ●羅針盤（操業中に使用）
- ●ワカメカマ（天然ワカメを取る道具）
- ●見突用メガネ（箱メガネでガラス入り）
- ●見突用モリ（ボラ・ブダイ・ヒラメ・メバルなど）
- ●天坪ばかり・分銅

●開館日　毎週火・木・土・日曜日・祝祭日（翌日休館）
◎午前十時から午後四時まで

●入館料　無料

●展示品　美術工芸品・生活用品・漁業石材業の資料など

真鶴小学校の子どもたち

クラブ紹介　つりクラブ

担当の加藤茂一先生の指導のもとに、月二回、港方面でつりをしたり、図書館で魚について調べたりしています。海に近い学校ならではの、楽しいクラブです。

六年　部長　高橋秀彰

ぼくたち釣りクラブは、四年から六年まで、約10名程度の小さなクラブです。毎週水曜日の五・六時間目には、真鶴港へ行き釣りをします。雨の日には残念ですが、図書館で釣りや魚に関する本を皆で読みあいます。四年生などは、はじめてなので、しかけなど、なかなかできない時があります。そんな時は、六年生が手伝います。たくさん釣れる時もあれば、何にも釣れない時もあります。

皆、釣りが大好きで入っているクラブなので、協力して楽しくやっています。

四年　高橋大介

ぼくたちは、真鶴港へ釣りに行きます。たまに、岩海岸にも行きますが、主に、真鶴港で釣りをします。

釣れる魚は、ハゼ、キス、メゴチ、オニカサゴなどです。カニなどが釣れることもあります。

たまに、大きなゴミが釣れ、ビックリしてしまいます。皆さん、ゴミを落とさないようにしてください。

海の色がきれいだと、多くの魚がつれ反対だと、あまりつれません。

それに、寒いとあまりつれません。魚も寒いのがきらいなのかなあと時々思ってしまいます。

四年　小沢一郎

釣りクラブに入る前は、釣りなんて簡単だと思っていたけれど、いざ、入ってみると、なかなか、むずかしいと思った。特に、しかけを作ったり、リールで投げたりするところがむずかしい。

最初のうちは、しかけを作ったりで、時間がすぎてしまって、何も釣れない事が多かったが、今は、三びきから、五ひきと、釣れる魚が増えてきたので、だんだん楽しくなってきた。

今、釣りクラブに入って、とてもよかったと思ってきた。

五年　真壁　徹

ぼくは、とても釣りが好きだ。でも、クラブの時は、全然釣れない。でも最初のうちだけだった。

何日かたったクラブの日、やっぱり釣れないなあと思っていたら、

「ぴっく。」

ときた。

やっと釣れたかと思いながら、リールを巻いていくと、やっぱり大きなコチが釣れてきた。その時は、「やった、やった。」と、心の中でさけんでしまった。

今は、だいぶなれてきたためか、どんどん釣れるようになった。最初は、つまらなかったクラブも、楽しくなり、とてもワクワクしています。

うおいちばの けんがく（二年生）

二年生が、社会科の学習も兼ねて、秋の遠足で、真鶴町の魚市場を見学しました。いろいろな魚を、ひとみを輝やかせて見ていました。

「魚がいっぱいのうおいちば」

おおくぼ　けんいち

まなづるのうおいちばは、たくさんの魚がとれていました。それに、まんぼうがとれていました。トラフグ、カンパチ、ホウボウ、オニオコゼ、メジナがとれていました。それに、かごに入っている、うるめいわし、あじ。

しお水が水そうから少しずつながれ出して、ぼくのくつはぬれてしまいました。

それと、こおりをわるきかい、みんなすごいものばかりです。

それに、おじさんたちがカゴカキダイやいろいろな魚をすてています。ぼくはもったいないとおもいました。

みんなは、魚をさわっていました。

たのしかったです。

「うおいちばのこと」

しおざわ　たまみ

きょうは、わたしたちのえんそくです。学校から、あるいていきました。足がいたくなりました。やっとついたら水がながれていて、くつがぬれて、くつしたもぬれてしまいました。

それから、まんぼうがいるってきいたのでいってみました。二ひきいました。わたしはびっくりしました。はじめて見ました。よくつかまえたなとおもいました。でも、いきたままのまんぼうを見たかったです。わたしは魚がすきだから、ぐるぐるまわってみました。ふぐ、さんま、きれいな魚とか、いっぱいでした。わたしはうれしくなりました。水がどんどんながれてきて、くつは、どんどんぬれてしまったけれど、たくさんの魚を見ていると、気になりません。

わたしは、おおきくなったら魚やさんになろうとおもいます。

釈迦堂遺跡発掘

真鶴中学校郷土研究クラブ

真鶴中学校郷土研究クラブは、今年、発足2年目を迎えました。昨年度は地震による津波災害をメインテーマに研究をしました。今年の研究テーマを如何にするかはかなりの議論を経ました。その結果、1年生の推す、縄文・弥生時代の遺跡の発掘と2年生の推す、津波研究の継続を同時に進めて行くことになりました。

「真鶴の縄文・弥生期の遺跡発掘」に関しては、発掘地の確定が難航しました。町発行の文献を研究したり、以前発掘に関与した人の意見を参考に目星を付けました。幸いにも、地主の御好意で発掘させて頂けることになりました。場所は釈迦堂遺跡付近の森氏所有の畑です。

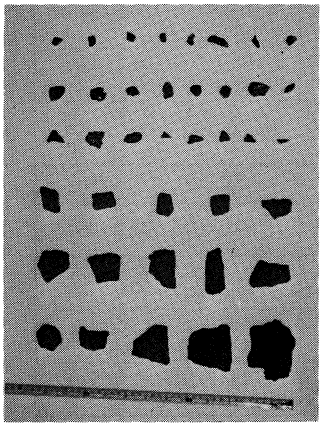
6月12日、生徒数名と共に発掘を開始しました。この日は、設計を中心としたため、表土数十センチを取り除いただけでしたが、それでも、土器片5点、黒曜石の矢じり1点を発見し、上々のスタートとなりました。2時間足らずの間にこれらの発見ができたことは、不安感が一杯だった生徒にとって大きな自信となりました。

数日後、スコップ、フルイ、カマ等を購入し、本格的な発掘を始めました。しかし、部活動の合間を見てやらねばならないのが辛いことでした。各部の活動日、活動時間が違うため、クラブ員がそろって活動できないことが作業効率を大幅に低下させました。しかし、幸いにも、この日、黒曜石多数を発見し、生徒の目はますます輝いてきました。この黒曜石が真鶴付近の産地と言われる2つの候補地いずれであるかはきわめて注目される。もし、伊豆諸島のものであったら、縄文期にすでに真鶴との交易が行われていた事の証明になり、真鶴の交易品も興味あるところです。また、箱根産であればこのルートがいずれであったのかも注目されよう。しょうらい、火山学の専門家の鑑定を仰ぎたい。

こうして、私達郷土研究クラブの発掘は進んだ。ところが、真夏に向かうにつれて思わぬ障害がいくつも出てきた。生い茂る雑草がせっかく掘った穴をふさぐように立ちはだかるし、衣服には茨がつくし、特に困ったのは蚊の大群だ。これにはまいった。仕方なく、近所の店で殺虫剤・防虫財を買い、蚊を避けながらの発掘になった。2人1組で1人は蚊を追い、1人はスコップをふるった。もっと大変だったのは炎天下の暑さだ。みんながそろう夏休みが絶好のチャンスと思ったのは机上の空論だった。特に午前中は強い日射をさえぎるものが何もないため、30分程度作業すると休憩を取らざるを得なかった。そうこうしながらも、幅1M、長さ8M、深さ1・5Mの溝を掘った。1・5M付近では地層も変わり、土器等が出土しなくなったため、発掘を中止した。

結局、成果としては、土器、石器、黒曜石（矢じり、包丁）、金属器があった。詳しい分析はしていないが、縄文期～弥生期にかけて真鶴半島にかなりの文化が根づいていたことが類推される。来年、チャンスがあれば種々の準備をした上で本格的な調査をしたい。

また、津波の被害調査に関しては発掘に重点を移したため、十分な活動ができなかったが、大正12年の真鶴の地図をまるなか旅館さんの御好意でコピーさせて頂いたので、来年以降、折をみて、調査をしたい。



体験記　二年　金本美香

〝発くつの喜び〟を味わうために、私達は深い穴をほり、土をふるいにかけ続けました。真夏の太陽が照りつける中でこういった同じ作業を何回もくり返していると、やはり苦しい時もありました。ふるいの上に残る物がただの石ばかりという事がほとんどで、それだけに、土器の破片などを見付けたときの喜びは大きかったです。みんなと協力して、郷土の古い歴史に少しでもふれることができたし、普段、できないような体験をこのクラブによってすることができてよかったと思います。

一つの喜び　一年　平井政竹

ぼくは小学校の時から歴史が好きでした。中学校に入学して郷土研究クラブがあると聞いた時、絶対に入るぞと思いました。郷土クラブに入ってからの活動は発掘やほりだした土器などをみがくことでした。――略――

発掘の一日目が終わりぼくがスコップを持って家に帰ったらみんなあきれた顔をしていました。

一番印象に残っているのは、小雨の中でクラブの友達二人と発掘したことでした。まだいい土器は見つけられないけどきっといつか見つけ出してみたいと思います。他の人から見るとつまらないことかも知れないけれど、ぼくにとっては、一つの喜びなのです。

漁業史関係町指定文化財一覧

（平成２年３月現在）

真鶴町では、文化財の保護と活用をはかるため、多くの文化財を指定いたしました。
今号では、漁業史関係の町指定文化財を抜粋し掲載いたします。

１．古文書の部

登録番号	名称	時代	備考
1	肴鮑海老売買文書	永禄７年(1564)	売買文書
2	北条氏朱印状	元亀２年(1571)	鮫追船免許状
3	北条氏朱印状	天正９年(1581)	〃
4	石巻康貞手形(断片)	天正９年(1581)	漁船免許状
5	北条氏朱印状	永正17～天正18年頃（1520～1590）	漁民下知状
11	相州西郡西筋真鶴村書上ヶ帳	寛文12年(1672)	最古の村勢要覧
31	船網諸道具等歳数覚記	元禄15年	漁業経営の実態を記録した冊子
32	田廣家文書	明治34年	江戸時代の漁業関係を中心とする資料、写本
36	池田彌惣丘衛鯛長縄漁関係文書	江戸時代	近世上方漁法の伝播に関する資料
37	規定一札之事	江戸時代	福浦村大敷網経営に関する資料
38	入置申入札之事	江戸時代	真鶴村漁師舟揚場購入について
39	漁業場の件小前一同集議	明治時代	真鶴村入会海面利用規定
40	根府川村黒根沖根拵網張立関係文書	明治時代	平井直栄の根拵網経営関係資料
42	證拠留	江戸時代	近世上方漁法伝播に関連する資料

５．民俗資料の部

登録番号	名称	時代	備考
5	木造和船模型「貴船丸」	明治12年(1879)	江戸期の和船の典型
6	紀州侯御用達船印旗	江戸時代	「紀」の文字を染め抜いた布製旗
7	紀州侯御用達船印木札	〃	紀州侯家紋と「紀州」の文字を墨書した木札
8	手札	元治元年	押送船の鑑札として発行された木製手形

編集後記

真鶴の漁業史を研究し集約した中路脩平氏や、近代真鶴漁業の沿革を調査した青木利夫氏の資料は、町指定文化財の文献を補う内容が記録され貴重なものです。

遠藤勢津夫氏の神奈川新聞「ふるさと史話」欄にまとめてある真鶴町教育委員会発行『真鶴湊』（昭和五十年二月）や、郷土を知る会の二十八号に及ぶ〝真鶴〟で、町関係の歴史を語り継ぐ記事によりこの特集を編集することができました。

また、真鶴小学校・中学校の郷土研究も、別の角度から真鶴の歴史を理解する学習に取り組んでいます。次代を背負う青少年が、文化財保護に興味や関心を示していることは誠に力強い限りであると共に多くの皆様のご協力をお願いします。

町立図書館には、次の漁業関係図書が蔵書されていますので、研究の資料に活用して頂きたくお知らせいたします。

①明治漁業史　②漁網集覧
③最新漁撈学　④日本水産史
⑤漁業経済概論　⑥海と民具
⑦海と魚の知識　⑧漁業政策百年
⑨実用漁業法詳解　⑩漁船
⑪病める海――素顔の日本漁業――
⑫沿岸漁業の担い手と後継者
⑬東京湾で魚を追う
⑭漁具に対する魚群行動の研究方法
⑮日本漁法図説